

## J. M. Baldwin のパーソナリティー理論

折橋 徹彦

## I

《人間性》(human nature) に関する問題は、古くから社会に関する理論の前提として多く論じられてきた。これら人間性に関する諸理論の系譜はさまざまであり、それを包括的にあとづけることはむづかしい。

今日の社会学、政治学、経済学等の社会科学のうちにも、人間の社会行動という次元で研究の対象を設定しようとする多くの試みがなされている。これらの研究は、アメリカを中心として発達してきた。そこで、アメリカを中心として社会行動の諸理論が著るしく発達した原因が問題となる。基本的にはアメリカ社会の歴史的発展という経済、社会的背景の問題があり、そこに展開されてきたアメリカ的哲学の影響を考えなければならない。

しかし、本稿においては、アメリカにおけるこのような行動理論の展開とともに発達し、又これらの行動理論の基礎となった、社会心理学におけるパーソナリティーの問題を、アメリカ社会心理学の発展の系譜をあとづけながら検討してみる。

アメリカの社会行動に関する理論において前提と

されるパーソナリティー理論は<sup>1)</sup> 精神分析学派の影響を受けているものが多い。フロイトの理論をそのまま受けついで、社会理論を展開している多くの例もある。しかし、いわゆる、フロイト左派の人々、カーディナー (A. Kardiner)、フロム (E. Fromm)、ホルナイ (K. Horney)、そしてサリヴァン (H. S. Sullivan) 等によって、フロイトのパーソナリティー理論は大きく修正され、この修正されたパーソナリティー理論を中心として社会と人間に関する問題が論じられている場合も多い。

フロイト左派によるフロイトのパーソナリティー理論の修正点はさまざまな点があげられるが、ここでは、パーソナリティーに対する現実社会の影響を重視するようになったことが問題となる。即ち、パーソナリティーの形成過程においてどのようにして社会的な影響が作用するかということである。左派の理論では、幼児が成長する過程での人間関係を通じての社会的影響が重要になってくる。サリヴァンのパーソナリティー理論における《対人関係》理論<sup>2)</sup>はこの点を中心として論じられたものであり、彼にお

1) E. Fromm : *The Fear of Freedom* 1942 などは典型的なものである。

H. D. Lasswell : *Power and Personality* 1948.

D. Rieseman *The Lonely Crowd* 1950. など、いろいろな意味で精神分析学派のパーソナリティー理論の影響がうかがえる。

2) H. S. Sullivan : *The Interpersonal Theory of Psychiatry*, 1953. このなかで、サリヴァンは“Interpersonal Theory”の系譜して G. H. Mead をあげている。

いては、フロイトにおける生物学的なあるいは固定的な対人関係による幼児の成長とはことなり、人間の成長過程に介在してくるあらゆる社会集団が、それぞれの人間関係を通じて、パーソナリティーの形成に影響をあたえることになる。この点に関して、ホルナイも、《環境的要因で性格形成にもっとも関係してくるものは、子供がその成長するところの人間関係である》<sup>1)</sup>と指摘している。

このようにして、精神分析左派のパーソナリティー理論においては《対人関係》を通じてパーソナリティーに社会的影響があたえられるということが指摘された。この対人関係の問題はフロイトによっても指摘されているが、左派は、さらにこの対人関係をパーソナリティー理論の中心にすえていることがわかる。

即ち、対人関係に関する概念を中心としてフロイトのパーソナリティー理論が修正されたと云えよう。

この点を中心として考察するならば、フロイト左派が他方においてよってたつアメリカにおいてジェームス (W. James) 以来展開されてきたパーソナリティー理論の系譜が問題となってくる。アメリカにおけるパーソナリティー理論の系譜<sup>2)</sup>として、ジェームス、ボールドウィン、クーリー、G. H. ミードなどがあげられる。

## Ⅰ

パーソナリティーの形成と対人関係の問題がアメリカ社会心理学のなかでどのように展開されてきたかをみると、その一つの流れとして、ジェームス、ボールドウィン、クーリー、G. H. ミードの自我論が問題となる。

本稿においては、J. M. ボールドウィン (1861—

1934) のパーソナリティー形成理論及び個人と社会に関する考察を検討することにしよう。

彼の学説を検討するにあたって、ボールドウィンの思想的背景を略述しておこう。彼はアメリカの心理学が《知的哲学や精神哲学》から《精神科学あるいは心理学》<sup>3)</sup>へと変る1890年代の過渡期の心理学者であった。スコットランド实在論の影響のもとで教育を受けた後に、ドイツ、フランスに留学した。しかし、留学において、ドイツの実験心理学の影響よりも、フランスのシャルコ、ジャネ、タルドから大きな影響を受けた。フランスの影響によって、彼の社会心理学は、発生的、機能的な立場にたつた。

この立場は、当時の児童心理学の先駆的な研究であった「児童と民族の心的発達」(Mental Development in the Child and the Race 1894) にあらわれ、更に「心的発達の社会的及び倫理的解釈」(Social and Ethical Interpretations in Mental Development 1897) によって、児童の発達の社会的背景と社会の発達の心理学的基礎との相互作用を説明しようとした。前者の研究においては、自分の子供のたんねんな観察が基盤となっており、後者の理論的研究においても哲学的思弁から社会心理学を分離する努力がなされた。

このような背景のもとで、ボールドウィンの社会心理学は、個人の社会的な発達と、諸個人からなる社会の進化が相互に関連しているという観点から出発する。まず、彼における、個人の社会的な発達は次のような自己意識の形成の段階による。即ち、個人は、その発達過程を幼児期から考えていく場合、社会に対してまったく無抵抗な状況から出発する。生存するためには、彼等は環境に適応していかなければならない。そこで子供は自分にあたえられた行動様式を無抵抗に取り入れていくわけである。この

1) K. Horney: *The New Ways of Psychoanalysis* 1939, p. 78.

2) ここに論じている、アメリカ社会心理学におけるパーソナリティー理論の系譜については、南博「体系社会心理学」昭和36年第5版、136—137頁に指摘されている。

3) A. A. Roback: *History of American Psychology* 1951.  
南博、堀川直義訳「アメリカ社会心理学」1956、131頁。

段階をボードウィンは「投影的段階」(projective stage)という。この「投影的」とは、子供の心に、彼をとりまく環境が、子供自身の意識にかかわりをもつ他の人々の行為を通じてうつしだされるという意味である。子供のこの自己の意識に写しだされたかって「他者」(alter)がおこなった行為を自己のものとして認識するようになる。この段階が「主観的段階」(subjective stage)である。更に、子供が他者によって投影されを行為様式を本当に自分のものとするためには、それを他の人に試みるという段階を経なければならない。これを「放射的段階」(ejective stage)という。子供はこの三つの段階を循環しながら発達していくのであり、ボードウィンはこの循環的な発達を「個人的発達の弁証法」(Dialectic of Personal Development)<sup>1)</sup>と呼ぶ。

このことからしても、個人にとって自己とよばれるものは、その大部分は、かつては、だれか他の人として感覚されたものであったことになり、自己が成立するためには他者の介在のもとでの三つの発達段階を経なければならないことになる。

個人は対人的状況をぬきにしては発達することができないことになり、自己を実現するあらゆるものは他者を介在するところの社会環境のうちにあることになる。

個人と社会の関連を考える場合、個人はまったく生理的あるいは、個人的欲求を中心として基本的には行動し、社会はこれに対立するものであるという考えが、フロイトの基本的な立場であった。

そこでは、人間関係が子供のパーソナリティーに影響するとはいっても、それは子供に対して敵意をもつ社会という単純な社会的要因を反映しているにすぎない。

ボードウィンにおいては個人と社会の基本的な対立ということは考えられないから、社会の多様な要因が人間の環境として作用することになる。

この人間の環境を「ソシェウス」(socius)とよぶ、これは、「社会的他者」(social alter)<sup>2)</sup>とよばれる人々であり、なんらかの意味で個人の発達に関連してくるあらゆる人々を指す。

しかし、他方において、社会的他者は、子供にとって投射的なものとして取り入れられることから、子供に対しては規則的、体系的でゆるぎのない確実なパーソナリティーとみなされる。このなかに子供の倫理的感覚の成立の契機があらわれると考えられる。ボードウィンは子供の倫理的規準を形成するに重要な他者として、父、母、乳母などをあげている。ボードウィンにおけるこの規準形成の過程は父、母、乳母の行為(conduct)が、服従と模倣によって解釈されるという子供の心理活動のうちにあるという。

そして、この倫理的規準はすぐれて伝統的なものであり、それは「社会的遺伝」(social heredity)を通じて子供に受け入れられる。この社会的遺伝とは「諸個人が伝統的事象を吸収する模倣過程、すなわち、伝統に対する個人的な反応なのである」<sup>3)</sup>。

子供はその個人的発達において、このような過程で社会化(socialization)されていく。

## II

個人のパーソナリティーの発達は、対人関係、すなわち、ソシェウスを中心とした状況でおこなわれる。この対人関係を重要な軌道として、ボードウィン以後のアメリカ社会心理学におけるパーソナリティー理論は展開される。

そこで、次にわれわれは、ボードウィン自身のパーソナリティー理論と社会理論の関係について考察しよう。彼によれば、心理学的観点にたつ社会理論は、社会的な側面での欲求がいかんして成立するかに関しての記述的な心理学を前提としなければならない、個人の発達の過程の研究のためには児童が、

1) J. M. Baldwin: *Social and Ethical Interpretations in Mental Development* 1897, p. 13.

2) *ibid.*, p. 30.

3) *ibid.*, p. 66.

社会の発達と関連しては民族が、彼等の生活環境となる諸条件とどのように関連するかが問題にされなければならない。

この環境的諸条件となるものはボールドウィンのいわゆる社会組織 (social organization) というものである。この社会組織というのはどのようなものであろうか。ボールドウィンは「社会組織の事象は諸思考よりなりたつ」<sup>1)</sup> という。

これらの思考の性質はどのようなものであろう。思考の起源はまず個人の心 (mind) のなかにある。それが社会的なものになるためには、社会、即ち社会の成員たちあるいは、成員の何人かが、そこにうみだされた思考について考え、知り、そして知らされねばならない。このようにしてはじめてこの思考は「一般的なもの」(generalizations) となる。思考はこのように社会組織の内容をしめすものであって、環境条件としてもっとも重要なものである。これに対して、信念 (belief) とか欲求 (desire) とはどのようなものであろうか。信念とか欲求は知識内容そのものではなく機能的な役割しかしめさない。即ち、模倣がおこなわれる場合、まず思考が模倣され、思考に含まれている信念を模倣することになる。又欲求についても同様のことが云える。人は他の人が考えている欲望の対象を思考することなしには欲しえないのである。

思考による模倣に対して、感情とか衝動の感染によっておこなわれる模倣的伝播 (imitative propagation) は、より本能的あるいは暗示的なものである。これによって固定した習慣が維持されるだけであって、新しい適応とか組織はうまれにくい。すなわち、思考、概念というものを通じてのみ、社会を発達させる新しい素材がうみだされるわけである。

思考は社会組織の内容である。個人の発達と関連した自己に関する思考は、ある一定の与えられた社会的諸関係に直接むすびついている。すなわち、個

人は彼をとりまいている人々全体を含んだ自己の思考を形成するにいたる。そして、このように形成された自己思考はあらゆる人々にとって共通の内容をもつことになる。子供たちがゲームをするとき、サークル全体の諸個人の思考に本質的に共通する部分が存在するとき、そのゲームが可能となる。私のなす行為はそのサークルのなかでは貴方の思考、彼の思考を理解するから可能であって、それは貴方が行為する場合でも、彼の場合でも同じである。このような思考の相互間の模倣がある場合に社会 (society) が成立する。即ち、これ以外の本能的、あるいは有機的な模倣は、感情的な模倣的伝播が新しい素材を生じないのと同様に、新しい素材を生じないものであって、そこには進歩を前提とする社会 (society)<sup>2)</sup> が成立しないのである。

この社会の状況を含む自己に関する思考は、単なる個人の自己に関する思考と異なって社会組織のいかなる内容となりえるのか。ボールドウィンによれば、それは私的なものと区別される「公衆性」(publicity) をそなえるものであるとする。

この公衆性は、自己に関する思考に作用することによって、個人の私的な自己に関する思考を高い次元へと方向づけるのである。即ち、個人の私的な自己に関する思考はあらゆる成人に多少とも分与されている「自己—思考—状況」(self-thought-situation) の組織に入れられることによって、社会的内容をもつようになるのである。

これを、何人かの人間から成立している集団内の相互作用という観点からみれば、集団内に成立する「自己—思考—状況」が発展していくことによって社会組織の存在そのものとなることになり、個人のパーソナリティーが直接社会と結びつくことになる。

ボールドウィンは社会組織の内容としての思考を中心として、個人と社会との関連を考察している。

1) *Social and Ethical Interpretation in Mental Development.* p. 504.

2) ボールドウィンにおける社会の概念、動物社会、あるいは人間社会でも感情によってのみ結びつく集団を companies とし、思考的模倣によってむすびつく集団を society とする。

そして、個人の社会的発達に模倣という社会組織の機能を媒介しているという。即ち、個人の自己に関する思考の発達は模倣的機能<sup>1)</sup>によって維持される。個人は模倣によって社会的コピーを主観的に理解する。そして、次に彼の自己に関する思考を放射的に他人に行使用することによって自分の社会に対する解釈を確証する。これは、個人の発達のあらゆる段階にあてはまるように、社会の発達にもあてはまる。

即ち、あらゆる個人において、あらゆる段階での自己—社会—状況は模倣を通じてのみ生じるのである。又、個人が公衆的な自己—思考—状況に統合されるのも模倣的一般化によるとされる。

模倣とは、ある個人が他の人を自分が何か新しいものを作るためにコピーとして使用するその過程をいう、又は、模倣されるものが、他の人ではなく模倣者自身に属している場合においてもこのような過程が考えられる。

#### IV

ボールドウインは対人関係を中心として、個人の発達の問題と、個人と社会の関連についての問題を検討してきた。

次に、社会における個人の役割についての彼の考察に若干触れることにする。ボールドウインは社会において作用する諸影響力を《社会的諸力》(social forces) とよぶ。この社会的力は基本的に個人のうちに起源をもつものと社会に起源をもつものがある。個人に起源をもつ場合は、個人は、思考し、闘争し、売買し、憎愛し、争いそして和すという状態をつづけることによって、社会組織や社会の進化運動を阻止したり、修正したりしている。このような役割は、単に天才とか犯罪者がおこなうのみでなく一般の人達によってもおこなわれている。個人は社会事象のうちに新しいものを作り出す。この場合、個人は思考者として、社会の慣習、信条、意見、制度がそれによって改修される新しい思考をうみだ

す。これは政治的問題から日常的問題まで一つの思考としてうみだされる。即ち、個人は《個別化》(particularizing) することによって社会的進歩に参加することになる。

しかし、個別化による変化も社会がすでになしとげた一般化にもとづいていなければならない。社会に存在している手段からあまりかけはなれていては、個別化したその思考は他の人の思考と関連をもつことができない。

社会が個人に対してもつ社会的諸力をボールドウインは《一般化》(generalizing) する力という。この社会のもつ諸力は個人がすでに個別化したものを一般化するという働きをする。社会はそれ自体として最初の思考者とはなりえない。それは諸個人がすでに思考したものを一般化するという作用をするのみである。そして、この一般化の過程を経て社会のなかでうみだされた新しいものが固定化されるのである。

しかし、ボールドウインは、社会を単なる個人の集合体以外のなものでもないというという立場にたつのではない。歴史の過程にはしばしば、その社会集団に属する個人にはまったく責任のないような事体も起こりうるのである。すなわち、集団に属する個人が単に個人として行為しても、そのような結果を生じないような事体がある。ボールドウインはこの問題に関しては、集合心理学の主張する集団心に関する考え方と類似点をもつ。勿論ある社会的な事象が集団的に生じるその時には、成員は集団に共通な考えを分与されている。

社会は個人の思考の特殊性、創造性と社会それ自体がもつ、その思考を一般化する傾向、普通化する傾向との相互作用によって進歩していく。そして、この場合個人の独創的な努力という過程は社会の進歩において不可欠な要因となる。

以上のことから、ボールドウインの基本的な理論は次のように構成されていることがわかる。個人は循環的に発達することによってより高い段階にたっ

1) *ibid.*, pp. 529—530.

する。この場合、個人の発達に介入してくる他者は、いわゆる社会の諸行為の規準の代行者である。彼等の社会的諸行為の規準は社会組織に規定されるものである。ボールドウィンにおいては、この社会組織の内容は思考あるいは概念であるとされる。

即ち、ここで、個人と社会の相互関連が説明される。思考を具体的におこなう個人が循環的発達の過程で自分が社会から受け入れた思考以上の思考をおこなう、すなわち発明をおこなう。そして社会のなかにこの思考が一般化されることで、社会自体の内

容が増大する。これが社会にとって進歩なのである。

この場合、社会自体も個人と同様な循環過程を経て進歩することになる。社会は、その内容が思考であることから心理学的な基盤によって発達するのである。

以上に考察してきた、ボールドウィンのパーソナリティーと社会に関する理論の系譜をさらにあとづけることにおいて、現代アメリカを中心として展開されている社会行動に関する諸理論のもつ性格をあきらかにすることができる。(1961. 8. 1)